

ノーベル賞の国際政治学

— ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦（1） —

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize:
The Nobel Peace Prize and Japan, Toyohiko Kagawa,
a Japanese Nominee after World War II (1)**

Nobuhiko YOSHITAKE

要 旨

第二次世界大戦後、日本人でまずノーベル平和賞候補となったのは、牧師、社会事業家、作家の賀川豊彦である。賀川は1954年、55年、56年、60年と4回推薦されている。賀川が同賞に推薦されていたことは当時から断片的に知られていたが、詳細は不明であった。

推薦者は、日本の国会議員（主に日本社会党所属）と賀川を知る海外の関係者（アメリカ人社会事業家のエミリー・G・ボルチ、ノルウェーの国会議員、教会関係者）である。彼らは、賀川が生涯を通して社会事業に専心し、社会改革により平和を生み出してきたことを高く評価している。

これに対して、ノーベル委員会は賀川を受賞者として選出することはなかったが、一定の関心をもって注視していた。1954年、55年、56年にノーベル委員会は候補を絞り込んだ際、賀川を残し、報告書を作成している。3報告書のうち、1954年のものは極めて詳細に賀川を分析し、賀川の影響力、存在感を高く評価している。それに対して、1955年、56年の報告書は短いものとなり、特に1955年の報告書は賀川の影響力が日本で戦前よりも弱まっていることに触れ、「戦争中の彼の追従が日本の社会生活の中で彼の立場、影響力を弱めた」としている。賀川に対するノーベル委員会の関心は1954年をピークに薄れていったことは確かであろう。第二次世界大戦中の政府、軍部と賀川との関係が授賞に対してマイナスに働いたことは否めない。

キーワード： ノーベル平和賞、ノーベル委員会、賀川豊彦、ノルウェー、第二次世界大戦

Summary

The first Japanese nominee for the Nobel Peace Prize after World War II was a Christian minister, welfare worker and author, Toyohiko Kagawa. Kagawa was nominated four times in 1954, 1955, 1956 and 1960. His nomination has been known since then by bits and pieces but the details were unknown.

The nominators were Japanese Diet members (mainly the members of the Socialist Party of Japan) and the relevant foreign parties (an American welfare worker, Emily G. Balch, Norwegian parliamentary members, and church workers). They highly appreciated his lifelong devotion to social works and efforts to create peace through the social change.

In turn, the Nobel Committee did not choose Kagawa as the laureate but observed him with a certain interest. The Nobel Committee narrowed down the nominees for the prize in 1954, 1955 and 1956, and left him as the nominee and prepared the reports. Of three reports, the report in 1954 analyzed him in great detail and highly appreciated his influence and presence. In contrast, the reports in 1955 and 1956 were brief and the 1955 report especially touched upon his declining influence in Japan rather than the prewar period and described “his servility during the war period led to diminish his position and influence in the Japanese society.” It is certain that the interest of the Nobel Committee in Kagawa decreased from its peak in 1954. It is undeniable that the relationship between Kagawa and the government or the military during World War II worked against his prize-winning.

Keywords: the Nobel Peace Prize, the Nobel Committee, Toyohiko Kagawa, Norway, World War II

はじめに

本稿は、第二次世界大戦後にノーベル平和賞候補となった日本人、賀川豊彦（1888～1960年）の推薦状況をノルウェー・ノーベル研究所にある史料で明らかにしたものである。第二次世界大戦後、まずノーベル平和賞候補となったのは、牧師、社会事業家、作家の賀川であった。賀川は、1954年、55年、56年、60年の4回候補となっている¹⁾。日本人候補としては、第二次世界大戦前の有賀長雄（国際法学者）、渋沢栄一（実業家）に次ぐ3人目の候補である²⁾。誰がいかなる理由から賀川をノーベル平和賞候補に推薦したのであろうか。また、ノーベル委員会での選考過程において賀川はいかなる評価を受けたのであろうか。

第二次世界大戦後、賀川がノーベル平和賞候補となっていたことは広く知られていた。ノーベ

ル委員会規則にあるように、平和賞候補の推薦を受理し、選考を行なうノルウェー・ノーベル委員会はノーベル賞の選考過程を50年間、非公開にしており、それ以前に誰が候補となり、また誰が推薦を行なったかを明らかにすることはない。また、推薦者自身も同様の50年間の守秘義務を負っている。しかし、現実には50年を待たずにノーベル賞候補、推薦者が明らかになることがある。その場合、主に候補の推薦者側から漏れたと考えられる。50年間の守秘義務が必ずしも守られていないのである。賀川の場合も、まさにそうした一例と位置づけることができよう。第二次世界大戦後、賀川をノーベル平和賞候補に推薦するキャンペーンが国内外で公然と展開された結果、賀川が同賞の候補になっていたことは周知の事実であった。

たとえば、1960年の推薦について、推薦直後の同年3月、賀川のかかわる「イエスの友会」の機関誌『火の柱』は、賀川がノーベル平和賞候補に推薦されたことを記事にしている。それによれば、「去る一月二十六日には片山哲、北村徳太郎、河上丈太郎、杉山元治郎、東久邇稔彦、田中耕太郎、天羽英二、小崎道雄の八名の諸先生が受付け期日に間に合うようにノールウェーの委員会宛に我が中央委員長、賀川豊彦先生の推薦状を発送して下さい」と詳細に記し、同年2月18日には推薦委員会(委員長は杉山元治郎)が結成されたことにも触れている。この記事は、「この運動は我が日本にとり名誉ある運動であるからその実現にご協力をお願いいたします」と結ばれている³⁾。しかし、賀川は同年4月23日に病死し、この推薦運動は活発な活動を展開する前に事実上終わっている。

また、賀川の死後、1964年に刊行された『賀川豊彦全集』第24巻の「賀川豊彦年表」は、上記の1960年1月の推薦には触れていないが、それ以前の推薦について触れている。すなわち、1955年2月に「ノーベル平和賞候補者として推薦される」、1959年2月21日には「世界連邦建設同盟総会でノーベル平和賞候補推薦を決議」、同年7月には「米国教会に賀川をノーベル平和賞候補に推薦運動起る」とある⁴⁾。

以上の経緯もあり、これまで賀川は1955年、60年にノーベル平和賞に推薦されていたと考えられてきた。たとえば、賀川の出生地であり、救貧活動の舞台でもあった神戸にある賀川記念館の展示においても、「1955年1回目のノーベル賞候補に推薦された」、「1960年2回目のノーベル賞候補に推薦された」と記されている⁵⁾。

以上のように、賀川が1955年、60年にノーベル平和賞候補となっていたことは断片的に広く知られていた。しかし、推薦の詳細はもちろん、推薦された年すらも完全には把握されておらず、あいまいな状態のまま賀川のノーベル平和賞推薦が紹介されてきたのである⁶⁾。

それゆえ、日本側の史料(特に、賀川豊彦記念松沢資料館の賀川関連史料)とともに、ノーベル委員会の史料に基づき事実関係を解明することは、ノーベル平和賞研究にとっても賀川研究にとっても意味があろう。まず第1章で賀川の生涯を簡単に振り返り、第2章で賀川関係の著作においてノーベル平和賞推薦がいかに紹介されているかを整理する。第3章以下では、確認された4回の推薦について、それぞれ推薦者と推薦理由、ノーベル委員会の評価を個別に考察したい。

1 賀川豊彦の生涯

まず賀川豊彦の生涯を簡単にまとめておこう⁷⁾。賀川は1888年7月10日、神戸で生まれた。父、純一⁸⁾は徳島の自由民権家で、元老院書記官、名東県高松支庁長、高知県徳島支庁長を務めた後、神戸で海運業を営んでいた。賀川は両親と死別後、5歳で徳島の本家に引き取られる。徳島中学校時代にアメリカ人宣教師H・W・マヤス(Harry W. Myers)から洗礼を受けた。中学卒業後、明治学院高等部神学予科に進学し、後に神戸神学校に移った(1911年卒業)。この時期、肺結核を患い、生死をさまよう体験もした。1909年12月24日、賀川は神戸の葺合新川のスラム街に移り住み、同地で伝道活動、救貧活動を開始する。1914年、アメリカ留学を果たし、1916年、プリンストン神学校から神学学士号を得ている。1917年に帰国後、神戸において伝道活動、救貧活動を再開するが、以後、労働運動、消費組合運動、農民運動など様々な社会運動に乗り出した。たとえば、1919年に大阪、1920年に神戸に購買組合を設立し、1921年には神戸の川崎造船所・三菱造船所労働争議を指導している。さらに、1923年の関東大震災後は、東京の本所に拠点を移し、同様の社会運動を関東で展開した。こうした運動により、賀川は単に牧師としてだけでなく、社会事業家として知られることになる⁹⁾。また、1920年に出版した自伝的小説『死線を越えて』¹⁰⁾が大ベストセラーになり、その後も多数の著書を執筆した結果、作家としても有名であった。著書の印税は、社会事業、伝道活動に使われた。

さらに、賀川の知名度は日本国内にとどまらず、海外でも高かった。第二次世界大戦以前の時期に、すでに多くの著書が外国語に翻訳され、賀川の救貧活動や思想が注目された。また、1920年代以来、視察、伝道活動のため、国内のみならず、中国、インドをはじめとするアジア、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなど海外も精力的に訪問している。そのため、たとえば1939年にはアメリカ人牧師、ハンター(Allan A. Hunter)は賀川をガンジー(Mohandas K. Gandhi)、シュヴァイツァー(Albert Schweitzer)と並ぶ3大偉人として高く評価する著書を刊行し、賀川の思想、活動を紹介している¹¹⁾。

第二次世界大戦中、賀川はその反戦思想のため警察に拘留されたり、憲兵隊から度々呼び出しを受けるなどの弾圧を受けた¹²⁾。1943年11月には国際的な反戦団体、国際反戦者同盟からの脱会を強いられ、イギリスの同団体本部に米英等の植民地主義批判、日本擁護の書簡を送った。1944年には海外向けラジオ放送においてアメリカ批判「米国滅亡の予言」を行なっている¹³⁾。賀川は、アメリカ人兵士が日本人兵士の頭蓋骨を弄び、大統領が日本人兵士の骨で作ったブック・ナイフを受けたとの情報に接し、「ああ、アメリカは再び喰人主義を二十世紀に復活した。……そしてアメリカの新しき喰人主義も、それ自身の退化によつて天よりの刑罰を受けるであらう。誠にアメリカが若しその物質をキリストの為に使はなければ天の罰を受けることは必至である」と述べている。1945年には、3月の東京大空襲を受けて、賀川はさらにアメリカへの非難を強め、

対米批判の放送を続け、文章も発表している。これらの言動にみられるように、第二次世界大戦中の賀川は従来の平和主義から「転向」したとも評されている。

第二次世界大戦後の1945年8月、賀川は東久邇内閣の参与となり、戦後復興に尽力し、国民総懺悔運動を展開した。1945年11月には日本社会党結党にも参画した。また、戦前に引き続き、ヨーロッパ、アメリカ、アジアにおいて伝道活動を積極的に行なっている。さらに、世界連邦運動にみられる平和運動でも活躍した¹⁴⁾。1952年11月に広島で、1954年11月に東京で、1957年10月に京都で開催された3回の世界連邦アジア会議で賀川は議長を務めた。世界連邦運動関係では、1954年2月、同運動を推進する団体の国際組織である世界連邦世界運動の副会長にも就任している。同年5月には東京で開催された国連未加盟国会議でも議長を務めている。このように、戦後は再び平和主義の立場から活発に活動をしたのである。

1959年1月、関西での伝道活動中に心筋梗塞で倒れ、その後、療養を続けたが、1960年4月23日、東京上北沢の自宅で死去している。享年71歳であった。

以上のように、賀川は牧師としてだけではなく、社会事業家、作家、平和運動家として多分野にわたる活動を展開した。そのため、第二次世界大戦以前から、日本国内のみならず、海外でも注目された日本人の一人であった。

2 賀川豊彦のノーベル平和賞推薦に関する先行研究

「はじめに」で述べたように、賀川がノーベル平和賞候補に推薦されていたことは、広く知られていた。それでは、その推薦はこれまでの賀川豊彦研究においていかに紹介されていたのであろうか。主要な研究の論点をまとめておこう。

まず、賀川を直接知る関係者が書いた賀川論に、ノーベル平和賞について言及したものがある。第二次世界大戦前から賀川と一緒に共同伝道も経験した牧師、黒田四郎は、『人間賀川豊彦』、『私の賀川豊彦研究』を刊行しているが、その中で賀川がノーベル平和賞をもらいそこねた事情を推察している。まず前者の『人間賀川豊彦』において、黒田は賀川が幼少時以来、人道主義的平和論を唱え、さらに協同組合の国際化による世界平和論を展開し、第二次世界大戦後は世界連邦政府建設による平和運動を推進したことを具体的に説明した後、賀川を「世界における平和運動のシンボル」と捉え、1955年にノーベル平和賞候補に挙げられたとき、「その受賞は当然なことと考えられた」とするが、受賞できなかったと述べる。さらに、1959年にも「二月には世界連邦建設同盟総会でノーベル平和賞候補推薦が決議され、同七月には米国教会に盛んな推薦運動が起こされた。その結果遠からず受賞するであろうと形勢が整ったようであったが、その翌年四月彼は召されてしまったので、とうとうノーベル賞をもらえないままその生涯の幕を閉じたのである」としている¹⁵⁾。

ノーベル平和賞に漏れた理由として、黒田は2点を挙げている。「落選の第一原因となったのは、

一九四四年（昭和十九年）十月に中支へおもむいて軍部に協力したということである」としている。これへの反論として、黒田は「たしかに彼が南京、上海、蕪湖、済南その他の地域へ宗教使節として訪問したことは事実であった。がその目的は軍部への協力などするためでは絶対なかった。費用も全部自費であった。……彼は弟以上に可愛いくてたまらない私[当時、南京を拠点に伝道活動中——筆者、以下同様]に、あいたい一心にすべてを忘れて、わざわざ南京くんだりまで出かけて来たのである」としている¹⁶⁾。

2点目に黒田が挙げた理由は、「敗戦の年から始まった痛烈な反米放送がやり玉にあがった。日本軍への協力でけしからんと言うのである」としている。この背景として、黒田は「それは三月十日の夜東京江東地区への米軍機による無差別爆撃が行なわれたことに原因している。ことに江東地区の本所を彼はこの上なく愛していた。そこをじゅうたん爆撃とか言って、広い地域を焼き払って何万という人たちを殺したり傷つけたりした。これを見て、彼は米軍の暴虐にじっと黙しておれなかった。その非人道さを全身全霊の力をふりしぼって批難をした。それが人道の守り手と誇るアメリカのすることか、クリスチャンの愛の精神はどこにあるかと訴えて、警告の声を張り上げた。しかしそれは、彼が真の平和主義者であるが故にしたことである」と説明している¹⁷⁾。

黒田は、1983年に刊行した『私の賀川豊彦研究』においても、前著と同様に、1955年、1959年のノーベル平和賞推薦の動きに触れ、授賞されなかった理由として、前述の2つの理由を繰り返している。すなわち、「聞くところによると米軍進駐軍指導部の中の一部の人たちが、極力先生の受賞に反対したということである。第一は一九四五（昭20）年三月十日、米軍が東京都の下町地区へ暴虐無類の無差別爆撃を実行した際に、先生が猛烈に米軍に反対する放送を続けたことは、日本軍への戦争協力をしたと言うのである。もう一つの理由は、一九四四（昭19）年十月に中支を旅行したのは、日本軍の侵略に協力したからで、ノーベル賞を受ける資格はないというのである」¹⁸⁾。

黒田の2冊目の著書で目新しい指摘としては、1959年に米国キリスト教界による推薦がなされた後、「翌年の初めには、秋には必ずノーベル賞が与えられると決定したと伝えられた」が、賀川が召天したため、「ノーベル賞は生存者のみに与えられるものなので、残念ではあるが遂に先生の受賞は実現されずに終わった」と述べている点である¹⁹⁾。この点には、黒田の誤解が含まれている。ノーベル賞の選考は、年の初めにはまだ決定がなされることはなく、また1960年時点では、生前に推薦がなされていれば、受賞の可能性はあった²⁰⁾。

さらに、黒田の2冊目の著書は、1974年に佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受賞した後に刊行されているため、それとの対比がなされ、興味深い。黒田は、「私どもは当然先生は問題なく授与されるものと思込んでいた。しかし後になって考えると、先生の身边にいた者は皆ノーベル賞に関する知識が皆無であった。ノーベル賞というのは必ず最も清潔な理想的方法で授けられるものと思込んでいたのである。つまり受賞に最も適した人物には、こちらから積極的に運

動などしなくとも、当然与えられるものと思い込んでいた。だがそれから二十年近く経過して、佐藤栄作元首相がノーベル平和賞の候補にあげられた時、その身边にいた人たちがあらゆる努力をし、あの手この手で宣伝に努めた結果やっと受賞することになったということを伝え聞いて、初めてノーベル賞の裏の姿を知り、ほんとうにびっくりしてしまった。平和賞は、あらゆる手を打って自らの功労を宣伝し、世論の大声援を作って初めて与えられるものであったらしい。私どもはノーベル賞の歴史について全く無知であり、そのため先生が受賞されなかったことを後で知らされた」と述べ²¹⁾、ノーベル平和賞選考過程への幻滅と推薦運動の不十分さへの後悔を吐露している。また、黒田は「後年佐藤栄作元首相がノーベル平和賞を受けたのは、私の考えでは、広島と長崎とに原子爆弾を投下した罪のつぐないに、賀川先生に授与すべきものをその身代りにという気持が幾分かはあるのではなかるうか」との推測も披露し²²⁾、賀川が受賞できなかったことに未練をもち続けている。

黒田に見られるように、第二次世界大戦中の賀川の言動をノーベル平和賞と結びつけた見方は、賀川関係者の中に共有されていたと考えられる。たとえば、賀川の追悼文集に元桜美林学園園長の清水安三は「若しも賀川先生が、戦争中小川清澄君と共に、牢獄から出所して後、ずっと香川県豊島に退いて蟄居して居られ、対米放送等をせず著作でもして居られたならば、終戦後いちはやくノーベル平和賞が贈られたであらう。賀川先生はノーベル平和賞なんかはほしくなく、危機に立つ日本人民の為に、じっとしていられなかったのだ」と書いている²³⁾。

日本人以外の見方として、アメリカの賀川研究者、ロバート・シルジェン (Robert Schildgen) についても触れておこう。シルジェンは、ドイツにおいて1954年にノーベル平和賞受賞者シュヴァイツァーに賀川推薦の支持をしてもらおうとする支援運動があったにもかかわらず、賀川は「未だ理由不明のままノーベル賞を受賞することがなかった」としている。シルジェンは、受賞しなかった理由として3点を挙げている。「このことに対する一つの説明は、賀川が戦時中に宣伝放送に携わったことが依然として彼の名声に汚点を残しているというものだった。確かに彼は、その放送をした動機をうまくは説明していなかった。賀川の娘、靱井梅子のような人たちは、長い間、多くの人から極端すぎると思われたバートランド・ラッセル [Bertrand Russell] の反核運動に同調したため、賀川はノーベル賞を与えられなかったと感じていた。三番目の要因は、単にノーベル賞受賞者選考過程そのもののゆがみだったかもしれない。賀川の死の年の一九六〇(昭和三五)年は、ノーベル賞受賞者選考過程の六十年間の歴史において、ノーベル平和賞が西欧や合衆国以外の国の個人によろやく授与された二度目の年だったのである」と述べている²⁴⁾。シルジェンは、第1点目の理由に関連して「第二次大戦勃発後、彼[賀川]が日本政府に屈服し<敵>に協力したとの情報は彼への非難を招き、多くの人には彼に幻滅を感じたのである。一九五五年に彼はノーベル賞候補にあげられたが、こういった非難が受賞を妨げたのかもしれない」とも指摘している²⁵⁾。また、第2点目のラッセルの反核運動への同調とは、1958年4月4日にラッセルらと核実験が憲法違反とワシントン地方裁判所にアメリカ政府を提訴したことを指していると考

えられる。シルジェンの第3点目の理由について補足するならば、1961年に1960年分のノーベル平和賞が南アフリカ連邦のルトウーリ（Albert John Lutuli）に授与された。これは、ヨーロッパ、米国以外の受賞者として1936年にアルゼンチン外相、サアベドラ・ラマス（Carlos Saavedra Lamas）が受賞して以来のことであった。この点に関するシルジェンの指摘は、事実認識として正しい。

以上のように、賀川がノーベル平和賞を受賞することがなかった理由として、これまで様々な見方が提示されていたことがわかる。大きく分類すると、第二次世界大戦中における賀川の言動（特に、軍部への協力と対米批判放送）、第二次世界大戦後の反核運動に対する賀川の支持、ノーベル平和賞選考過程におけるノーベル委員会の欧米偏重の傾向、賀川推薦者の不十分な推薦運動の4点に集約されよう。しかし、どれも確証のない仮説として提示され、真相は闇に包まれたままである。第3章以降では、実際の4回の推薦状況を明らかにすることで、これらの理由を再検討したい。

3 1954年の推薦

（1）推薦状況

前述のように、賀川は1954年、55年、56年、60年の4回、ノーベル平和賞に推薦されている。まず1954年の推薦状況をノーベル研究所の史料に基づいて具体的に検討してみよう。

1954年に賀川を平和賞候補に推した推薦書は、1954年推薦状ファイルには3通ある（表1参照）。推薦日順に、片山哲²⁶⁾、金龍周（Yong Joo Kim）、エミリー・G・ボルチ（Emily G. Balch）からの推薦状である。しかし、ノーベル委員会が正式な推薦書として年次報告書にリストアップしているのは、このうち片山とボルチからの2通である。金は、元駐日韓国代表部大使であり、恐らく正式な推薦者の要件に該当しないとの判断がノーベル委員会によりなされたと考えられる。しかし、推薦状ファイルに保存された事実から考えると、賀川の推薦を補強する参考資料として使われたのであろう。

表1 ノーベル平和賞候補、賀川豊彦の推薦者一覧（1954年）

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付（差出地）
1954	賀川豊彦	社会事業家・作家	片山哲	元首相、元日本社会党党首、社会党顧問、衆議院議員、世界連邦日本議員連盟会長	1953年12月16日付（東京）
			Yong Joo Kim	元駐日韓国代表部大使、新韓国学術会議会長	1953年12月25日付（東京）
			Emily G. Balch	アメリカ女性社会事業家、1946年ノーベル平和賞受賞者	1954年1月24日付（アメリカ・マサチューセッツ）

注：肩書きは、基本的に推薦状に使われたものを載せた。

出所：Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobel Fredspris* およびノーベル研究所史料より、筆者作成。

では、各推薦状の内容を詳しくみてみよう。まず片山元首相が1953年12月16日付けで賀川をノーベル平和賞に推薦する推薦状を出している²⁷⁾。A 4用紙1枚に簡潔に推薦理由を述べている。すなわち、片山は「1954年のノーベル平和賞候補として、私はここに心より謹んで賀川豊彦博士の名前を提出いたします。賀川博士の全生涯、そして世界平和と人道のためにその生涯を捧げたことは、極めて明白であり、徹底したものであり、良く知られておりますので、同氏はかかる榮譽に値いたします」と記し、世界平和、人道の観点から賀川をノーベル平和賞候補として強く推している。

2通目は、元駐日韓国代表部大使の金龍周による1953年12月25日付けの推薦状である²⁸⁾。金は「1954年ノーベル平和賞受賞者に賀川豊彦博士を心より謹んで推薦いたします。40年以上にわたり、彼はその全生涯を日本のみならず他国の貧しい人々のために捧げてきております。同時に、彼は全世界の平和を保障する計画を作り上げてきました。その計画は、その成功裡の運用のために承認を必要としています。混乱した我が韓国の観点からは、我々の再建のために彼のような高い意志が本当に必要です。ここに賀川博士の名前をあなた方に心より提出し、彼が同賞を受けることに値すると確信しております」と述べている。金が触れている「全世界の平和を保障する計画」について詳しい説明はないが、賀川が第二次世界大戦後に手がけた世界連邦運動に見られる活動を指しているのではないかと考えられる。朝鮮戦争がようやく休戦した1953年に韓国からも賀川支持が寄せられたことは、賀川の国際的な活動、影響力を裏付けるものであり、マイナスに働くことはなかったであろう。

3人目の推薦者は、アメリカ人のボルチである。彼女は、社会事業家としての活動により1946年にノーベル平和賞を受賞した人物であった。歴代受賞者は、ノーベル平和賞候補を推薦する資格を有しており、彼女はそれを利用して推薦状を書いたのである。なお、この1954年1月24日付けの推薦状は、ノルウェー・ノーベル委員会書記兼ノーベル研究所所長、ショウ（August Schou）宛に出されており、ボルチ本人のレターヘッドのついたA 5サイズ便箋に手書きで記されている²⁹⁾。賀川の推薦について、ボルチは「私が〔候補を〕通知する特権を利用して、有名な日本人、賀川の名前を提案していることを報告するよう、あなたにお願いいたします。あいにく私は病気で、推薦に彼の名前を正式に出す以上のことはできません。適切な文書が他の関係者からあなたの元に届くと信じています」と述べている。このように、ボルチは病気のため、推薦理由を詳しく説明できず、賀川を紹介する関連資料を添付することはできなかったが、賀川をノーベル平和賞候補に正式に推薦したのである。

(2) ノーベル委員会の評価

以上の推薦に対して、ノーベル委員会の評価はいかなるものであったのであろうか。結論から言えば、賀川は1954年の受賞者として選出されることはなかったものの、ノーベル委員会では一定の関心をもって注視された存在であったことは確かである。

毎年、推薦状の締め切りである2月1日以降、その年の選考が開始され、候補は徐々に絞り込まれる。「ショート・リスト」といわれる絞り込まれたリストに載った候補については、ノーベル委員会の委員、顧問らが詳しい調査を行ない、報告書を作成する。これは審議のための資料であり、候補を最終評価するものではないが、候補について批判的に検討しており、審議の方向性を大きく左右するものである。ノーベル委員会はこの報告書に基づいてさらに審議を続け、最終的に5名の委員の全会一致（不可能な場合は多数決）により受賞者を決定し、10月に発表する。このように、選考に8ヵ月以上が費やされるのである³⁰⁾。

1954年の選考では、初めてノーベル平和賞に推薦された賀川についてノーベル委員会は早速報告書を作成する決定を行なった。この年の24候補（個人19、団体5）のうち、賀川は新たに報告書が作成された4候補の一人であった（そのほか、以前に報告書が作成されたことのある2候補については新しいことがないとして、新報告書が作成されなかった）³¹⁾。これに見られるように、賀川は、候補が4分の1に絞り込まれた段階でも、依然として候補として残っていたのである。

賀川に関する1954年報告書は、16ページにもわたり賀川を極めて詳細に分析している³²⁾。候補に関して作成される報告書の中には数ページのものもあり、この賀川に関する報告書は例外的に長文である。これを執筆したのは、ノーベル委員会顧問レード（O. T. Røed）であった。最高裁判所の弁護士を務めたこともある人物である。賀川の生涯を伝記風に詳しく紹介し、さらに彼の著作に基づいてその思想も整理している。

その内容を簡単に見てみよう。まず本稿の第1章で紹介した経歴がさらに詳細に書かれている。神戸で1888年に生まれ、両親の死後、徳島で叔父の所で育てられ、16歳で伝道師マヤスの下、洗礼を受け、東京、神戸の神学校に進んだという子供時代のことまで詳しい。さらに、1909年、神戸のスラム街で救貧活動を開始したことを詳細に紹介している。同地がペストやコレラなどの伝染病の蔓延する地域であったことに触れた後、1911年に賀川と会ったデンマーク人牧師スコウゴー・ピーターセン（C. Skovgaard-Petersen）の本から引用して、このスラム街の悲惨さを説明している。賀川が重い目の病気になりつつも、特にスラム街の子供たちへの支援を行なったことを強調している。アメリカ留学からの帰国後は、労働運動、農民運動などに乗り出したことにも詳しい。

本稿の紙幅の都合で社会事業家としての活動の詳細については省き、ここでは平和問題についての紹介を検討したい。1954年報告書には「賀川と平和問題」という項目があり、賀川の平和思想も詳しく紹介している³³⁾。賀川が暴力の使用を社会問題で反対しているだけでなく、国家間でも反対していると述べ、たとえば17歳の時に日露戦争に反対し、友人に殴られたことに触れている。さらに賀川は平和主義的、反軍国主義的態度をとり続け、タゴール（Rabindranath Tagore）、ガンジー、アインシュタイン（Albert Einstein）、ロマン・ロラン（Romain Rolland）とともに、徴兵制に反対する署名をして国際連盟に提出し³⁴⁾、1928年には日本に反戦者同盟を

設立している。1937年に日中戦争が始まると、上海に行き、中国人に対して日本軍がもたらした困難と苦悶に謝罪したとする。帰国後、警察に拘留されるが、松岡洋介外相の仲介で解放された。また、1941年には日米戦争の阻止に向け、訪米した。

しかし、日本の真珠湾攻撃と第二次世界大戦への参戦後、賀川の態度が変わったことを報告書は述べる。すなわち、中国への侵略戦争に反対したようには、連合国への日本の侵略戦争を批判しなかった。戦争中の賀川の異なる発言により、特にアメリカでは嫌悪感が生み出されたとの指摘も紹介している。しかし、賀川の平和主義観に動揺が認められるとしても、それは少なからず支配的な軍事独裁のせいであったとする。それは、戦争末期に賀川が日本の戦争遂行を批判した際、すぐに拘留されたことにも示されている。降伏直前、賀川が釈放された際、軍が命を狙っていることを知り、逃げなければならなかったとしている。

このように、1954年報告書は第二次世界大戦中の賀川の態度に変化があったことを指摘しているが、その理由を軍事独裁下で拘留されたり、身の危険に直面した結果として見ている。全体的に賀川に対して同情的な説明をしていると考えられる。また、前後の説明と比較すると、第二次世界大戦中の説明は必ずしも長いものではない。

第二次世界大戦後について、報告書は日本で平和主義的見解がいかんして支配的になったかを指摘している。その理由として、日本が核戦争にあった最初の国となったことに加えて、賀川が無抵抗、非暴力を強調したことも挙げている。特に憲法第9条を引用し、賀川がこれを歓迎したことに触れている。「我々の新憲法は世界平和実現の里程標となるだろう。人類の歴史において初めて戦争の放棄により、『剣をとる者は剣にて亡ぶべし』というキリストの警告が政府によって受け入れられたのである。我々は、『偉大な』国の定義を変えつつある。真に偉大な国は、大きく、金持ちで、近隣国とけんか腰である必要はない。偉大な国は賢明で、道徳的で、敬虔な国である。我々が追求する理想は、日本を神が喜ぶ国にすることである。こうして、我々は文明の頂点に到達し、平和愛好国の例となるであろう。大きくもなく、金持ちでもなく、強くないが、我々はこうして真に偉大になるであろう」と賀川が述べていることを長文で引用している。しかし、報告書は、その後の外交面の展開により、日本の見解が変わってきたとし、日本が防衛戦争を行なうことを妨げないという政治家、芦田〔均〕の見解にも触れ、朝鮮戦争を機に日本政府が7万5000名の警察予備隊づくりに向かったことを指摘している。賀川も朝鮮戦争により見解をやや変更し、平和と秩序の維持のため限定的な国際警察軍を置くことが必要となりうる状況であると認識しているとする。さらに、賀川が「一つの世界」運動にも賛成していることにも触れている。

以上のように、報告書の「賀川と平和問題」は子供時代以来の賀川の平和観を追い、第二次世界大戦中の言動、さらに戦後の言動についても紹介している。全体的に賀川の平和主義を評価した内容になっている。

報告書の最後では、「賀川は日本だけでなく、全東洋で有名である。特に中国、韓国では彼は

大きな影響力を持っている」と述べ、さらに「賀川は学んだ通りに生きてきた故に、今日世界で目覚ましい立場にいる」としている³⁵⁾。そして、賀川を人間のために輝き、暗闇で道を示す松明のように、愛によって光り輝く人間としてアッシジのフランチェスコ (Franciscus Assisiensis)、シュヴァイツァーと並べる声があることを紹介して、終わっている。このように、1954年報告書は賀川の影響力、存在感を高く評価していたのである。

結局、1954年の選考結果は「保留」となり、受賞者は選出されなかった。そのため、選考は翌年に持ち越されることになった。ノーベル委員会の規定により、選考は1年間持ち越すことができるのである。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) 1954年から3年連続の推薦については、ノーベル財団ノミネーション・データベース (<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2012年10月8日アクセス)ですでに明らかにされている。同データベースは、現時点では1956年分までしか公開されていない。1960年の推薦については同年の推薦状ファイルが2010年に公開された時点でノルウェー・ノーベル研究所にて筆者が確認した。なお、賀川は1947年、48年にはノーベル文学賞候補にも推薦されているが (<http://nobelprize.org/nobel_prizes/literature/nomination/database.html>、2012年10月8日アクセス)、本稿はノーベル平和賞に焦点をあて考察する。なお、賀川がノーベル文学賞、平和賞(1960年分を除く)に推薦されていたことは、以下の記事で報道されている。「賀川豊彦 ノーベル文学賞候補だった」(『毎日新聞』2009年9月13日朝刊)。「賀川豊彦 ノーベル文学賞候補に2回」(『読売新聞』2009年9月14日朝刊)。「社会運動家・賀川豊彦 ノーベル文学賞候補だった」(『朝日新聞』2009年9月14日夕刊)。
- 2) 有賀、渋沢がノーベル平和賞候補となった経緯については、以下の拙稿を参照。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦前の日本人候補——」(『地域政策研究』第13巻第2・3合併号、2010年11月)、3～12頁。1961年までの日本人候補の全体像については、以下を参照。拙稿「ノーベル平和賞と日本——歴代日本人受賞者・候補者が問いかけるもの——」(『世界』第837号、2012年12月)。
- 3) 「ノーベル平和賞候補に——賀川豊彦氏を推す——」(『火の柱』第173号、1960年3月5日)、5頁。
- 4) 賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集 第24巻』(キリスト新聞社、1964年)、621、623頁。そのほか、賀川についての代表的伝記である横山春一『賀川豊彦傳』においても、年譜に1955年2月に「ノーベル平和賞の有力候補として推薦さる」とあるのみである(横山春一『賀川豊彦傳(増訂版)』警醒社、1959年、601頁)。
- 5) 賀川記念館(神戸市中央区吾妻通5-2-20)、常設ブース8「平和・人権・共生」、2012年2月24日確認。
- 6) たとえば、以下の著作には1956年、58年、59年、60年にノーベル平和賞に推薦されていたと読める略年表がある。武内勝口述、村山盛嗣編『賀川豊彦とボランティア(新版)』(神戸新聞総合出版センター、2009年)、355頁。
- 7) 賀川豊彦全集刊行会編、前掲『賀川豊彦全集 第24巻』の年表を主に参照した。賀川研究の動向と評価については、倉橋克人「日本キリスト教史における賀川豊彦——先行研究との対話を通して——」(賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦——その思想と実践——』新教出版社、2011年)が詳しい。
- 8) 賀川の父、純一については、雨宮栄一『青春の賀川豊彦』(新教出版社、2003年)、12～31頁。
- 9) 社会事業家としての賀川については、以下が詳しい。雨宮栄一『貧しい人々と賀川豊彦』(新教出版社、2005年)。隅谷三喜男『賀川豊彦』(日本基督教団出版部、1966年。岩波書店、2011年)。
- 10) 賀川豊彦『死線を越えて』(改造社、1920年。復刻版、P H P 研究所、2010年)。
- 11) Allan A. Hunter, *Three Trumpets Sounds: Kagawa, Gandhi, Schweitzer* (New York: Association Press, 1939), pp.3-51. 賀川をガンジー、シュヴァイツァーと並ぶ偉人として見る見方は、国際的に広がっていた。たとえば、賀川の死去後、関係者の追悼文集が日本で出版されたが、その中で元同志社大学学長の田畑忍は「また私はロンドンで、ホテルの主人が『賀川先生をガンジー、シュバイツァーと共に世界三大偉人だ』と言うのを聞いて噂の通りだと思った。そしてデンマークでは、内村鑑三の名前を知らない多くの人たちが、賀川豊彦の名前を記憶しているのを知って、先生が世界的日本人であることを痛感したのであった」と記している(田畑忍「恩師賀川先生」田中芳三編『神は我が牧者——賀川豊彦の生涯と其の事業——』イエスの友大阪支部、1960年、16頁)。
- 12) 第二次世界大戦中の賀川の思想的転換と米英批判の評価について、河島幸夫『賀川豊彦の生涯と思想』(中川書店、1988年)、第2章、同『賀川豊彦と太平洋戦争——戦争・平和・罪責告白——』(中川書店、1991年)、19～35頁、雨宮栄一『暗い谷間の賀川豊彦』(新教出版社、2006年)、288～333頁、ロバート・シルジェン『賀川豊彦——愛と社会正義を追い求めた生涯——』賀川豊彦記念松沢資料館監訳(新教出版社、2007年)、第10章が詳しい。シルジェンの原

ノーベル賞の国際政治学

著は、1988年にアメリカで刊行されている。

- 13) 賀川豊彦「米国滅亡の予言」(賀川豊彦全集刊行会編、前掲『賀川豊彦全集 第24巻』)、412～413、569頁。
- 14) 賀川の世界連邦運動活動については、小南浩一『賀川豊彦研究序説』(緑蔭書房、2009年)、第10章を参照。
- 15) 黒田四郎『人間賀川豊彦』(キリスト新聞社、1970年)、199、200頁。
- 16) 同上、200～202頁。
- 17) 同上、202頁。
- 18) 黒田四郎『私の賀川豊彦研究』(キリスト新聞社、1983年)、48頁。
- 19) 同上、49頁。同様の指摘は、同書385頁にも見られる。
- 20) ノーベル平和賞の選考方法については、以下を参照。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程——」(『地域政策研究』第13巻第4号、2011年2月)、29～33頁。
- 21) 黒田、前掲『私の賀川豊彦研究』、384～385頁
- 22) 同上、385頁。
- 23) 清水安三「若しも賀川先生が」(田中編、前掲『神は我が牧者——賀川豊彦の生涯と其の事業——』、50頁)。
- 24) シルジェン、前掲『賀川豊彦——愛と社会正義を追い求めた生涯——』、352～353頁。
- 25) 同上、17頁。
- 26) ノーベル委員会の年次報告書、ノーベル財団のノミネーション・データベース (<http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/nomination/database.html>、2012年10月8日アクセス)は、ともに「Totsu Katalayama」と記している。これは推薦状のオリジナルからわかる通り、片山哲(かたやま・てつ)元首相(1887～1978年、日本社会党)の間違いである。
- 27) Letter from Tetsu Katayama to the Nobel Peace Prize Committee, dated 16 December 1953, PFL 8/1954 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1954.
- 28) Letter from Yong Joo Kim to the Nobel Peace Prize Committee, dated 25 December 1953, Ad PFL 8/1954 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1954.
- 29) Letter from Emily G. Balch to Mr. Schou, dated 24 January 1954, PFL 20/1954 in Det Norske Nobel-Institutt Prisforslag (PFL) 1954.
- 30) ノーベル平和賞の選考過程については、以下の拙稿を参照。前掲拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞の歴史的発展と選考過程——」、31～32頁。
- 31) Det Norske Stortings Nobelkomité, *Redegjørelse for Nobels Fredspris 1954* (Oslo: Grøndahl & Søns Boktrykkeri, 1954), s.5. 報告書が作成された賀川以外の3候補は、イギリス前首相のアトリー (Clement Atlee)、アメリカ人宗教家のブックマン (Frank Buchman)、インド首相のネルー (Jawaharlal Nehru) であった。新しいことがないとして新報告書が作成されなかった2候補は、アメリカ人歴史家のグレーム (Frank Porter Graham)、アメリカ人産児制限指導者のサンガー (Margaret Sanger) であった。
- 32) *Ibid.*, s.31-46.
- 33) *Ibid.*, s.39-42.
- 34) 1925年のヨーロッパ訪問中の出来事である。
- 35) *Ibid.*, s.46.